

〔書評〕

# 山下久夫『秋成の「古代」を読む』

近衛典子

タンス(一)

第二節 秋成・「御国ぶり」の変容——「古今集仮名序」

へのスタンス(二)

第三節 「血かたびら」の「御国ぶり」——〈讓位〉をめぐって

第四節 「天津処女」の「御国ぶり」——「人の心は花

にのみうつり榮ゆる」中で

第五節 「海賊」における海賊の申し立て

第六節 「豫之也安志夜」の古代幻視——「在五中将物

語」の視点

第三章 「難波」中心の古代幻想——「金砂」評釈を通して

第一節 幻想の都「難波の宮」

第二節 摂津国西岸へのこだわり

第三節 「水運の難波」への郷愁と喪失感

第四節 「難波の海」幻想の広がり——「玉藻刈る海少

女」像・「名寸隅」論

この度、山下久夫氏の『秋成の「古代」』が上梓された。著者は常々『雨月物語』『春雨物語』以外の秋成作品を丁寧に読むことの必要性を説かれ、また『難波人』秋成という視点の重要性をも指摘しておられたが、本書によって、著者が脳裏に描いていたであろう秋成の世界の全体像が、明確な輪郭を伴って鮮やかに眼前することとなった。

本書の構成は次の通りである。

## 第一章 記述される「古代」

第一節 「焼失」の古代語り

第二節 正史の根拠を問う

第三節 復古の虚構性

第四節 古代の記述・批評性

## 第二章 浮上する九世紀

第一節 宣長・真淵・景樹——「古今集仮名序」へのス

山下久夫『秋成の「古代」』を読む

## 第五節 今宮村漁村を語る

## 第四章 評釈の恣意性と創造性——『金砂』評釈を読む

## 第一節 東歌・防人歌評釈の意味——逸脱・抵抗の評釈

## 第二節 モノローグの評釈書『金砂』——秋成における

## 憶良論の問題(一)

## 第三節 老い・病・子思いのモチーフ——秋成における

## 憶良論の問題(二)

## 第四節 貧窮問答歌評釈について——秋成における憶良

## 論の問題(三)

一瞥してわかるように、本書の体裁は秋成論において一般的な、作品別の論集とはなっていない。また小説、国学、和歌といったジャンル別に論じられているわけでもない。基本に据えられているのは国学であるが、著者は、物語作者としての秋成に大きな比重がかかっていた従来の研究とは一線を画して、これまでとは全く違う新たな切り口、「秋成にとつての「古代」とは一体何であったのか」という視点から、ジャンルを横断してあらゆる作品を組上に上げ、そこに通底する秋成の問題意識を抉り出そうと試みるのである。

まず第一章では、主に「遠陀延五登」「安々言」を題材として、秋成が自らの火災体験を通じて古文獻への懷疑を募らせ、本居宣長と鋭く対立したという周知の事実を改めて取り上げる。特に、天徳四年の内裏炎上に対する秋成の特別な関心を認め、それを秋

成が古文獻の不確実性を論じる際の明確な戦略と位置付ける。宣長の『古事記』絶対化に対して、秋成は一応は『日本書紀』を正史と考えていた。しかし、時勢の要請に応じて四段階の編纂を経た(著者はこれを秋成の「断続編纂論」と名付ける)『日本書紀』が、何ゆえに正史という公的權威性を持つのか。『日本書紀』の正史たる根拠を問うという視座が「遠陀延五登」「安々言」に見られる隠されたモチーフであると著者は言い、秋成は古代の理想が「どのようにして失われていったのか」という問いを決して手放さない、という点が、繰り返し強調される。すなわち、古代性の喪失を不可避と受け止めた上で、なぜそうなのかを歴史の一駒一駒に注視しながら問い続ける秋成の批評意識に注目するのであり、この冷徹な「知」のあり方に、懷徳堂の影響を見る。そして、真淵や宣長の唱える古代も所詮は「私」であり理想化された世界ではないと看破した秋成が、国学の枠組みの虚構性を鋭く突きながらも、それを外側から批判するのではなく敢えてこの国学の構図の内側に飛び込み、自らの新たな構図を捉え直そうとした、とする。この結論は抽象的でわかりにくく、また一見、著者の展開する論と先行の論との差異は微小に見える。しかし以下の章において、次第に著者の目論見が鮮やかに姿を現わすのだ。

第二章はまず『古今集』の問題から説き起こされ、他の国学者との比較によって、『古今集』においても先述した天徳四年の文献焼失の問題が関わってくると考える秋成の特異な立場が浮彫りにされる。そして、『古今集』撰録時の嵯峨帝、仁明帝の時代か

ら延喜年間に至る時の流れの中で万葉風の「御国ぶり」がいかに変容していったかを見つめる秋成の眼差しに注目する。すなわち奈良朝と九〇五年の『古今集』成立の間の、「九世紀」への秋成の視線を捉えるのだ。さらに、この「九世紀を記述しようとする秋成」という視点から、『春雨物語』中の歴史物語群「血かたびら」「天津処女」「海賊」、及び「豫之也安志夜」が論じられることになる。第一章で指摘された秋成の問題意識、「失われた古代」「虚構された古代」という視座が、秋成を国学研究へ、小説執筆へ、そして新たな古代の幻視へと導いたというのである。秋成の歴史認識や小説作法については従来も多々論じられてきたが、それは往々にして、小説読解のためのインデックスとして秋成の国学上の言説を利用する、というものであった。「九世紀」というキーワードの導入によって、これまで別個に論じられてきた秋成の歴史認識や国学的立場と『春雨物語』などに描かれる小説世界とが、ここに対等のものとして有機的につながり、筆者は点と点が一本の線で結ばれたような爽快感を味わった。それとともに、秋成の「執筆する」という営みが立体的に浮かび上がってきたように感じられる。

続く第三章は、万葉集評釈書「金砂」を題材にした、これまで誰も論じたことのない「難波宮」という新しい視点からの秋成国学への切り込みであり、著者が最も力を入れて論じたところであろうと思う。第一章で秋成が国学の内側にとどまり「自らの新たな構図を捉え直そうとした」と結論付けた、その新たな構図の提

山下久夫「秋成の「古代」を読む

示、すなわち秋成自身の理想の古代像とは一体何であったか、という問いに対する、著者の大胆な新説の提示である。著者は再興された「難波宮」と「味経宮」への秋成の強い関心を指摘し、さらに「味経」は現在の「淡路庄」であると飛躍する特異な論の展開に注目して、秋成の隠棲の地ともなった淡路庄は秋成の心の故郷であり、上代の質朴さと重ね合わされている、とする。さらに、秋成の視線は遠く播津国西岸にまで延びて、かつてあったはずの難波の海の賑わいを幻視しているとして、郷愁と喪失感を伴った古代語りの様子が描き出される。ここでの秋成の執筆態度は、歴史を語りつつ史実を自在に離れていく、恣意が創造を生み出す『春雨物語』と全く同様であろう。国学の成果など度外視して、あり得べき古代の「難波」がつむぎ出されているのである。単なる万葉集の和歌評釈として読むのではなく、その背後に顔を覗かせる秋成の思想の根幹に迫ろうとする、魅力的な新説の登場である。この目新しい論の当否は、今後活発に検討されるべきであろう。今、秋成の難波観ということに限定して、思い付くままにいくつかの疑問を記せば、秋成の「播津国西岸へのこだわり」は、結局どこに収斂していくのだろうか。或いは、秋成が淡路庄を退隱の地に選んだことに、秋成の積極的な意思を認めるべきか。まさに退隱した時に出版された『書初機嫌海』のペンネーム「洛外半狂人」の「洛」には古代の難波宮が意識されているのか。秋成の故郷というものを考えた時に、堂島の位置付けはどのように考えられるか。…今まで考えたこともない地点に心がいざなわれる、

刺激的な論である。

あとがきによれば、著者は古代文学研究の最前線にも加わって啓発を受けたといい、その成果が大いに発揮された論となつてゐる。この第三章を読解するためには大阪の古代史及び地理についての深く正確な知識が必要不可欠であり、論の可否を検討するにも、著者と同程度の理解が求められる。考えてみれば秋成は堂島の商家の主であり、その周辺は我が庭の如く、日常生活の中で日々巡り歩き熟知していた場所なのであるから、それは当然要求される知識のはずであつた。しかし正直に申せば、筆者が最も読解に手間取つたのもこの章である。現実問題として、たとえば難波が七世紀当時、海運で世界に開かれた日本随一の都市であつたこと、都が平城京に移つても難波宮は相変わらず副都として隆盛を誇つていたこと、淀川・大和川の大幅な流域変更が難波宮の盛衰に関わることなどの「難波宮」の歴史的・地理的位置付けは、ほとんど読者の共通認識とはなつていないのではないだろうか。読者と同じ土俵に乗せるためにも、飛鳥宮、平城京、平安京という一般的な時間軸の上に難波宮を位置付けた古代大阪史、及び関連する地図を掲出していただければ、理解の大きな一助となつたのではないかと思う。

第四章では引き続き「金砂」を取り上げ、秋成の万葉集評釈の方法を丹念に追う。ここで特筆すべきは、「櫛の杣」と「金砂」を初めて二つの独立した「作品」として弁別したことであろう。正親町三条公則への献上を意識した公的な性格を持つ「櫛の杣」

と、自らのためだけに書かれたモノログとしての「金砂」。この二書の執筆姿勢の違いを明確にし、「金砂」により積極的な位置付けを与えた。そして、何ゆえにそのような評釈が付されたのか、という秋成の意識にまで深く降り立つた考察がなされる。もはや注釈書の体をなしていない、限りなく創作に近い「金砂」という指摘は重要である。秋成にとつての「執筆する」営みを考える大きな手掛かりが、また一つ提供されたと言えるであろう。

以上、駆け足で本書の内容を紹介してきた。従来の秋成研究書に慣れた目には非常に斬新に映る本書の記述スタイルは、冒頭に述べたような著者の問題意識から生み出されたものであろう。「何ゆえに歴史はそう動いたか」という秋成の問いがそのまま転化されたかのように、著者は「何ゆえに秋成はそう書いたか」という問いにあくまでもこだわつた。その結果として、あらゆる作品が等価に置かれ、新たな解釈が施されたのである。本書の何よりの功績は、片寄りのある秋成研究の現状に大きな風穴を開け、謙虚に秋成作品を読むことの大切さと面白さをまざまざと示してくれた点にあるだろう。

（森話社 二〇〇四年一月二十五日 三九三頁）

本体価格七五〇〇円

（このえ・のりこ 駒澤大学助教授）